

はじけるこころ

Vol.42

まいにち学校 まいにち街の中 こどもの笑顔につなげる

発行

箕面市人権教育推進会議

箕面市教育委員会 人権施策課

TEL:072-724-6921

FAX:072-724-6010

E-mail: edujinken@maple.city.minoh.lg.jp

平成28年度

箕面市人権教育推進会議

―箕面の在日外国人教育、国際理解教育―

平成28年(2016年)6月1日(水)

箕面市役所 教育委員会室

講師 箕面市国際交流協会

課長 河合 大輔 さん

箕面市立第三中学校

教諭 上田 健輔 さん

「箕面市人権教育推進会議」は、有識者や市民、教職員等で構成され、市の人権教育の推進や基本方針に対する助言、人権教育の調査研究・広報等を検討する組織です。今年度第一回目の会議では、「箕面の在日外国人教育、国際理解教育」をテーマに意見交換を行いました。

まず、箕面市国際交流協会(国流)の河合さんから、国流での取組をお聞きしました。国流では、外国人のほか国際結婚により生まれた人、海外からの帰国者など、いわゆる外国にルーツを持つ子どもたちが集い、楽しみながら勉強等をする「子どもほっと」という活動を毎週土曜日に実施するほか、中高生向けキャンプや、学校と連携し、国際理解教育の授業を実施するなど、多様な活動を推進しています。また、相談事業で

は、子ども、保護者、学校等、様々な方から住まいや病院、学校のことなど、多様な内容の相談が寄せられ、対応をされています。



次に、市立中学校教員で、市内小中学校教員の研究組織である「箕面市在日外国人教育研究会(市外教)」の事務局長の上田さんから、市外教の活動についてお聞きしました。授業の研究や実践はもちろんのこと、教員研修としてフィールドワークの実施や高校進学等に向けた多言語進路ガイダンスの開催、多民族フェスティバルへの参加等、様々な取組を行っています。

河合さんの話からは、①国際交流協会だけでは子どもの置かれた環境(学習歴等)を十分には把握できないこと、②学校と協力し、多様なニーズに対応できる全時的なサポート体制を構築していくこと、等が課題であることがわかりました。

また、上田さんはハイトスピーチの問題を取り上げ、「ハイトスピーチ

目次

箕面市人権教育推進会議

―箕面の在日外国人教育、国際理解教育―

イキキとわやか(学校)

- ①「子どもの貧困」に対して一人ひとりができること(河合)……………2
- ②「性的マイノリティ」(上田)……………3

せがいのへんから(市外教)

- ―とよかわみなみ幼稚園 国際理解教育の取組―……………3
- 子どもほっと……………5
- ―箕面市国際交流協会 子ども向け居場所づくりプログラム―……………5

多文化コースサマーキャンプ

- ―箕面市国際交流協会 外国にルーツを持つ仲間が集う交流の場―……………5

街の活動紹介

「らいつびあクッキング」……………6

司書さんのお話の本

- 『らいつびあくをいごめるのこ』……………7
- 「意見・1感想」……………8

- 「意見・1感想をお待ちしています」……………8

はあつてはならないと思いますが、もし、仮に外国にルーツを持つ仲間がハイトスピーチにあつてしまつたら、『おかし』と思えませんが、大人に相談するなど何か行動できる子どもを育てたい」と語つてくれました。

本会議の委員からは「国際理解等」に関する課題は、外国にルーツを持つ人こそつでない人が共に関わるように改善される。両者が関わることで、よりよい良好な関係ができるような状況を追求すべき」との意見がありました。

お一人の話を聞いて、身近にいる外国にルーツを持つ方に対して、今日からでも自分できなことがたくさんあるのではないかと、振返るきっかけになりました。



河合さん



上田さん

(事務局)

イキキキわやかに学ぶ会

① 「子どもの貧困」について一人ひとりが考える「イキキキわ」

平成28年(2016年)6月3日(金)

箕面市立メイプルホール 小ホール

講師 市の法人あつちすくーる

理事長 渡 剛 さん

幼稚園や小中学校の保護者のかたを対象に、人権啓発の連続講座として、「イキキキわやかに学ぶ会」を毎年実施しています。今年度の第一回は、「子どもの貧困」をテーマに講演会を実施しました。

講師の渡さんは、市内で、一人親家庭の子ども等を対象に、学習支援をされています。渡さんは、「自身の体験を交えながら、子どもの貧困に関する現状や、実際に渡さんが関わつてこられた子どもたちの様子について説明されました。

講演の中で、参加者に対して、「子どもの貧困」といふ言葉の問いかけをされました。例えば「毎朝、学校に遅刻していませんか」「宿題をやつていない子どもも」「進路について真剣に考えない子ども」が目の前にいた場合、皆さんならどのようなことを考えますか、等です。

「人口、食糧、エネルギーを消費する」といふ貧困状態などは、目に見えず、こわい「絶対的貧困」です。しかし、貧困はそれだけではありません。その国における所得の平均値の半分以下の収入で生活する、「相対的貧困」と呼ばれる状況に置かれてくる子どもたちは、その存在が見えにくい貧困です。だからこそ、先に投げかけられたような質問の状況があつた場合には、意識的に子どもの背景等に注意を払ふ必要がある、といふ指摘は大切な視点が多かつたのでは。

また、「貧困状態にあるのは自己責任」といふ考え方があつることについては、個人の努力だけではどうにもならない現状があることを、様々なデータを示しながら「自己責任で片付けられない問題」として教えるつもりです。



最後に、四つの「私たちが知ること」を紹介されました。

① 「知ること」
報道されていることはほんの一部です。それ以外の現実がある。子どもを多様な機会を通して知ることが大切。

② 「伝言」(1) (1)

例えば、この講演の話を誰かに伝える。そこがご自身の貧困に理解のある人が増え、貧困家庭の孤立を減らせる社会になること。

③ 「応援伝言」(1) (1)

例えば、すべし支援活動している人に寄付をするなど(お金、食べ物、服等)。

④ 「行動伝言」(1) (1) (自分のまわりの範囲)

知り合の幼稚園児の送迎支援や週末に出かけるなどのご自身も参加して一緒に出かけるなど。

この伝言が、私たちに何をどう実践できるかを残さなければ。

(事務局)

② 「性的マイノリティ」(1) (1)

平成28年(2016年)6月24日(金)

豊田市メイトール ホール 小ホール

講師 NPO法人 Japan GID Friends

理事長 清水 展人 さん

「イキキキわやかに学ぶ会」第「回」のテーマは、「性的マイノリティ」でした。

徳島から来ていただいた講師の清水展人さんは、戸籍上女性として生を授かりました。しかし、心と体の性の不一致である「性同一性障害」に悩み、性別適合手術を受け、戸籍も名前も変更しました。そのした経験を活かし、現在は性的少数者の支援活動等に取り組まれています。

講演では、講師から絵本『じいじなかないかのめ』と『わたしはあかね』の紹介がありました。そ

のあや、この絵本について参加者同士話しながら、いろいろな人の立場を想像したり、「○○であげよう、△△の△△をわけてあげよう」に思いをよすがされました。



「自身のこれまでの経験のお話では、例えば「病院に行く」という、私たちが当たり前にしている言葉、なかなかできない現実を知りました。日本におけるマイノリティの生をどうと差別意識の存在を感じさせられました。」

性的マイノリティや「GID」といふ言葉が社会において認知されつつあります。しかし、「GID」だけでなく、「インターセックス」身体的に男女の区別がつきにくい人、「O(クエスチョニング＝自分の性別や性的指向に確信が持てない人)」「トランスジェンダー」といふことについて紹介があり、今回の講演で初めて知る人が多かったようです。

個性や思いをそのまま受けとめられる社会の実現、これが私たちに求められている課題の一つです。あらゆる人にとって生きやすい社会をきえ

る、としても貴重な機会となりました。

(事務局)

せがいのいからいじかた

〜じいじなかなみ幼稚園 国際理解教育の取組〜

とよかわみなみ幼稚園には毎年、外国籍の子どもたちが入園しています。今年度は、韓国、中国、ミャンマー、マレーシア、エジプト、ケニア、インドネシア、イギリスにルーツを持つ子どもたちが通園しています。(8月現在)。園では、国際理解教育に積極的に取り組まれており、その一つが「せがいのいからいじかた」です。「1」数年続けてきている活動ですが、外国にルーツを持つ保護者を「ゲストティーチャー」としてお招きし、母国について子どもたちに紹介していただきます。他の保護者も参観が可能です。



6月1日「せがいのく」から「た」までは「ア編」を行いました。



ケニア人の「両親が民族衣装を身にまとい、ケニアの様子を紹介してくれました。お父様から「ケニアにはいろいろな民族があり、勇敢なマサイ族では、一人でライオンを狩ることができなければ、一人前の大人として認められないんだよ」と話があった時には、子どもたちから「ケニア人の〇〇くんも、大人になったら一人でライオンと戦うの?」と驚きの声が上がりました。「私たちはマサイ族じゃないから大丈夫」とお父様からすべし説明があり、みんな安心していました。

また7月1日は「ア編」の「ミャンマー編」を行いました。



「こちらがミャンマーの素敵な衣装でお越しくださったお母様からミャンマーの暮らしているところを紹介いただきました。ミャンマーは仏教の国なので、男の人は生涯に一度は必ずお坊さんになる」と聞いた途端、子どもたちも「お坊さん」になりたてました。



「せがいのく」から「た」までは「ア編」の取組を通じて次の成果がありました。

- ①外国にルーツを持つ子どもたちが、自分のよさを再認識できました。みんなからの注目によって、外国で自信を持つ姿を見せるようになりました。
- ②保護者に参観してもらい、外国にルーツを持つ保護者と日本の保護者が話したり、関わったりするきっかけとなりました。
- ③外国にルーツを持つ子どもたちのことを、他の子どもたちが「もっと知りたい」と感じようになりました。



今後このような活動を続けることで、外国等に親しみ、違いを知り、認め合う子どもたちが育つほつと、実現していきます。

（子どもかわみなみ幼稚園 園長 結城美保里
教諭 岩井 真樹）

子どもほつと

～箕面市国際交流協会 子どもほつと居場所へのプログラム～

1月の記事中の2枚の写真が「ご覧いただきありがとうございます。これは毎週土曜日、箕面市国際交流協会で行われている「子どもほつと」の取組の様子（イメージ）です。



この取組では、外国にルーツを持つ子どもたちが集まり、ボランティアのかたと一緒に日本語の勉強や学校の宿題をしたり、みんなでテーブルゲームなどで遊んだりする活動等を行っています。これらの活動を通じて、いつもの学校等とは違う場所で、親からも少し離れ、様々な出会いやつながりを作り、元気になる居場所づくりを行っています。



ボランティアスタッフとして、学習サポートと調整等を行うコーディネーターが1人前後、部屋で待機して、十～二十数人の子どもの学習支援等を行います。ボランティアのかたには特に外

国語能力を求めている訳ではありませんが、中には外国語が堪能なボランティアのかたもいて、子どもたちが母語で話す機会もあります。

「子どもほつと」では、子どもたちは自分でやりたい学習課題等を決めています。学校の宿題をする子どももあれば、基礎的な日本語の学習をする子ども、一人で読書にふける子どももいます。学習よりも「ボランティアや他の参加者等と話がしたい」という目的で参加する子どもも少なくありません。多くの子どもたちが学習課題を終えたあと、トランプやオセロなど様々な活動をするアクティビティの時間になるのですが、非常にエキサイティングな活動になります。

「子どもほつと」の場が、子どもたちの安心できる居場所の一つになっていくと感じています。中には茨木市から来る子どももいます。その子どもは、「外国から来た友だちが、ここにはたくさんいて、話しやすいから」と参加の理由を嬉しそうに教えてくれました。まさに活動名のとおり「ほつと」できる活動なのだと思えた瞬間でした。

（事務局）

多文化ユースサマーキャンプ

～箕面市国際交流協会 外国にルーツを持つ仲間が集う交流の場～

外国にルーツを持つ中学生、高校生を対象にした「多文化ユースサマーキャンプ」が7月、箕面市国際交流協会の主催により開催されました。こ

のキャンプではスポーツや野外炊飯などを通して、ボランティアも含めてお互いに関わりを深めることを目的とした実施をわけています。

数年続いている恒例行事として「ふたば」のキャンプを楽しみながら、子どもも少なくないそうです。参加者の中には、日本の中学校や高校だけでなく、インターナショナルスクールに通っている生徒もいました。ボランティアスタッフとして参加している人の中には、過去にこのキャンプに参加していた元中高生もいました。



野外炊飯をしている場面では、とても暑い中、

一生懸命調理をしながら、中学一年生が高校3年生に大学入試について熱心に質問するなど、いろいろな年齢の子どもたちの関わりが見られました。



このキャンプでは、自分たちがつくる料理として、カレーを定番メニューに設定しているそうです。過去にはネパールの子どもが非常に上手にカレーを作り上げ、大活躍したことがあったそうです。宗教上の観点から、使用する肉を分けて、二つの鍋でカレーを作ったり、肉を使わずシーフードカレーに変更したりするなど、外国にルーツを持つ中高校生を対象としたキャンプならではの

工夫をしています。以前は「リマタン」(イスラム暦第9月で、1ヶ月間日の出前から日没まで飲食を断つ)の期間中にイスラム教徒の生徒がこのキャンプに参加したことがあり、その時には、夕食は陽が暮れてから、朝食は陽が昇る前にとったのがベスト。

様々な国にルーツを持つ子どもたちがつながり、協力しあうことで、自尊感情を高めたり、様々な居場所へ入りやすくなりやすくなるこのキャンプは、とても貴重な活動だと、実際に見に行き感じました。

(事務局)

街の活動紹介「らいてびあふキッズ」

平成28年(2016年)7月16日(土)

らいてびあふキッズ(菅野市立菅野中央人権文化センター)

参加者：止々呂美小学校、菅野小学校、西南小学校、北小学校、豊田支援学校の小中学生

菅野市菅野にある「らいてびあふキッズ」(菅野市立菅野中央人権文化センター)には、放課後や長期休みの子ども居場所「びあふルーム」があります。子どもたちは、いもやお弁当を持って来たり、「コンビニ」で飯を買って来たり、「びあふ食堂」を利用したりしますが、1〜2ヶ月に1回、自分たちで料理を作る「らいてびあふキッチン」が開催されます(参加料は一人500円ほど)。今回は、7月の梅雨明け前、暑い土曜日に、小中学生12名ほどが参加してシューマイ入り肉まんを作りました。講師は、かっちゃんおはちゃ



- ーレシピー
- ① クッキングシートに型紙を貼る
 - ② ラップに生地を貼る
 - ③ 生地を平たたくはなシノーマイを貼る
 - ④ 肉まんの形に包む
 - ⑤ ラップにクッキングシートの上を貼る
き、15〜20分蒸す
 - ⑥ 出来上がり

とびきり、ごちそうは「ひめびあん」の掃除をしたり、「ひめびあん」で子どもたちのために調理をしていただいた。レシピは、日頃料理をしない子どもたちにも簡単に楽しく作るためのレシピを考えた。上手なレシピをレシピ本に載せる。

やれどレシピですが、初めてみんな料理をするという経験、戸惑い子どももいました。そんな中、年上の子どもが年下の子どもへのエプロンの紐を結んであげる姿が見られました。初めて会う友だちには、名前を書いたシールを胸に貼ってもらい、お名前カードを紹介してました。ごち調理を始める子どもたちはおもしろい作業をしてました。一緒に調理をするという経験、子どもたちにはおもしろい経験になってました。



最後は、シノーマイ入り肉まんだけでなく、持ってきたお弁当も広げ、おしゃべりをし、ワイワイ楽しみながらお昼をいただきました。通常は、学校も異なるのでお昼の機会がない子

どもたちが、らびびあん職業のかたのサポートを受けて、一緒に作業する。いじりた新しい友だちも増えたりしています。いじりた仕掛けがもっと地域の小中学生の間に広がってほしいなと思います。

(住民委員 澤 さや佳)

司書さんのおすすめの本

『ムリクシなことをいじめる〜』



ルイス・サッカー／作
はらるる／訳
文研出版 2009

楽しい学校生活を送っていた3年生のマーヴィンは、ある日、いじめっ子の「ブル」を認めなかったことで、その子から「鼻をほじった」とタラメをネタにからかわれます。マーヴィンが「ほじってない」と反論しても、ますます噂は広がって、親友も離れ、じつと先生にまで信じてもらえず、教室で泣いてしまっていました。

彼の様子に気づいた両親は家族を集めます。兄のシエイゴは前に自分がいじめられたことを話し、妹リンジーの一言は、マーヴィンにまだやっていた大事な宿題を思い出させ、そのことが解決のヒントとなっていくのでした。

重いテーマでありながら、物語の中の子どものたちは、生き生きとしてユーモラスです。家族がみ

